

# 『中国天津市と日本の教育の違い』

天津日本人学校 教頭 垣内 眞哉

## 1 はじめに

天津市は、首都北京の南東 100km ほどにあり、中国華北地域の工業の中心地域として古くから発展を遂げてきた。北京市、上海市、重慶市と並び、中国の 4 中央直轄市として 1500 万人を超える人々が暮らしている。貿易の要所として古くから栄え、日本で知られる「天津甘栗」は、天津周辺の華北地方で採れる上質の栗が集積港である天津に集められ日本に渡ったためその名が広まったと言われている。

現在は、トヨタ自動車をはじめ多くの日系企業が工場を持ち、日本とのつながりは深い。冬と夏の寒暖の差が激しい大陸性の気候であり、近年は空気が悪い日も多く暮らしやすい環境とは言えない。

しかしながら、天津の人たちの多くは素朴で優しく、親日的な印象を持つ。治安もよく、生活上不便を感じることはない。

経済の発展はいまだに衰えることなく、ビル群が増え続けている。租界地時代の歴史を感じる建物は、現在でも大切に使われて名所となり人々が集っている。



## 2 本校の現状

本校は、3年間の補習授業校の時代を経て、1999年に「九河国際村」の施設を借り、天津日本人学校が開校した。2006年に児童生徒数の増加に伴い、天津市の郊外にある津南区の新校舎に移転した。移転時の児童生徒数は152人であった。

日中の経済交流が活発化するなか現地の日系企業は順調に拡大を続け、本校の児童生数も2008年には220人を数えるまでになった。しかし、2010年度にはアメリカに端をえた経済の減速は現地でも影響を受け、児童生徒数の増加が止まり180人前後で推移している。2012年度は206人でスタートしたが、尖閣諸島国有化に対する反日行動の影響や大気汚染の影響を受け、児童生徒数は減少傾向である。

本校は、国際的な視野を持った人間を育てるために、すべての学年で中国語、英会話を実施している。現地校やインターナショナルスクールとの交流会を大切にしている。小学部では社会科学見学で市内の公共施設や日系企業を訪れ、中学部では北京の日本大使館を訪れたり、日系企業の協力で職場体験を実施し、体験活動を重視している。宿泊行事では小5は北京、小6は西安、中2は上海、蘇州に出かけ、中国文化を直に感じるができる。また、日本文化を学ぶために裏千家の茶道体験や書き初め会の取りみも毎年実施している。



### 3 現地の教育環境

天津には、日本人学校の他にインターナショナルスクールが何校かある。天津在住の国人は、韓国人が約4万人、ついで日本人が約5千人、あとは世界各国から少数ずつでる。そのため、どのインターナショナルスクールも多くが韓国人で欧米系が少しといった状態であり、日本人の児童生徒は少ない。

現地の学校は、日本と同じ六・三・三制で、中学までは教育費を国が負担する義務教育である。学歴が将来の生活に大きな影響を及ぼすために教育熱心であり、学校ではたくさんの宿題を出し、また夜は塾に通っている子も多い。子どもたちはテスト近づくと夜遅くまで学校で勉強している。1979年から始まった一人っ子政策の影響もあり、どの家庭も子どもに対する関心と期待は大きい。

そして、登下校時の学校周辺は、保護の送迎の自家用車ために大渋滞となる社会問題がある。

### 4 天津市の教育事情（学歴重視の社会）

中国の学校は、日本の学校よりもはるかに知育に重点を置いている。高校の場合、「考」と呼ばれる大学入試に向けて、ハードなカリキュラムが組まれることになる。

中国の教育制度は、日本と同じく小学校6年間、中学校3年間【初級中学「初中」】が義務教育である。その後、「中考」と呼ばれる高校入試を経て、3年間の高等中学「高中」に進学する。

「中考」の受験科目は省や直轄都市によって異なるが、天津市では国語・数学・英語・理科・科学・政治の6科目である。

「高中」には市や区には、いわゆる重点学校と呼ばれる有名進学校がある。これらの学校に合格する学力のない生徒は、中等専門学校などの職業訓練校で学ぶことになる。

「高中」の課程を終えた生徒たちは、最も過酷とされる「高考」に挑むことになる。中国全体では高中へは50%、大学へは21%の生徒が進学している。同年の日本の高校進学率94.4%、大学進学率が52.3%であるのに比べると、大学進学はまだまだ「狭き門」という。ただ北京、上海、などの都市部では大学進学率はかなり高くなる。

中国の学校は9月入学であるため、入試はそれに先だって実施される。「高考」は1977年の開始以来、7月7、8日に実施されていたが、2003年以降は6月7、8日となり現在に至っている。この日は受験生本人もさることながら、保護者の緊張は頂点を迎えることとなる。こうした様子は毎年メディアを通じて報道されるため、中人で「高考」の存在を知らない人はまずいない。受験科目は文系では国語150点・数学150点・英語150点・文系総合（歴史・地理政治）300点、理系では国語150点・数学150点・英語150点・理系総合（物理・化学生物）300点となり、ともに合計は750点満点である。試験時間は日本の大学入試に比較して長く、1科目あたり2時間から2時間半にもおよぶ。

大学合格後は概ね学内での寮生活で、中国語で「三点一線」と形容される、宿舎・食教室の三点を往復するだけの勉強中心の生活を送ることになる。

中国の場合、学歴社会が日本よりも徹底しており、学歴の差がそのまま所得の差、更に社会的地位の差となっている。



したがって中国の中学・高校では、日本に比べてはかに勉強漬けの生活を送ることになる。日本人は「高校では、勉強よりもっと幅広い間形成を…」と考える人が多いように思うが、中国の中高生はそんなことを考え余地も無いほど勉強に追われている。

では生活指導は全くないかという、そうではない。たしかに日本ほど生徒の生活に関わることはないが、もちろん校則は存在する。天津市の中学・高校では「天津市中学生日常規範」と呼ばれる中高生が守るべき規範が定められている。概ね日本の校則と変わるところはないが、一例をあげてみる。

- ・身なりをきちんとし質素で上品であること。パーマや染髪、化粧やネックレスは禁止する。
- ・衛生に気遣い、良好な衛生習慣を育むこと。ところかまわず痰を吐いたり、ゴミを捨てない。
- ・文明的にふるまい、下品な言葉を使わない。他人を罵ったり、喧嘩をしたり、賭博行為をしない。未成年が足を踏み入れてはならない場所には行かない。
- ・精神状態を健康にすること。性的・暴力的・封建迷信的描写のメディアには触れない。
- ・不健康な歌曲は歌わない。迷信活動には参加しない。

日本の学校の「学級」に相当するものが「班 (バン)」である。「班」は「班主任」呼ばれる担任教師のもとで管理される。生徒のクラス代表、すなわち「学級委員」に相当する役職を「班長」と言う。

役職としては日本の委員長と大差ないが、一般的に班長は生の中でも比較的成績優秀、かつ指導力のある生徒が選ばれ、あらゆる活動の先頭に立ち、名誉ある役職である。



#### 4 中国の教育課程 (天津市の小学校の例)

中国の学校は二学期制をとっている、基本的に土日が休みの週5日制である。

【第一学期】 9月 (第一月曜日) 開始

10月 国慶節から1週間程度の大型連休の休み

11月上旬 中間テスト

1月下旬 期末テスト、冬休み開始 (春節をはさみ約1ヶ月間)

【第二学期】 3月上旬

5月労働節から1週間程度の休み (連休前後 中間テスト)

6月期末テスト

7月上旬 夏休み開始 (夏休み2カ月)

上記は一例であり、特に1月～2月にかけての日程は、春節 (旧正月) の日程で年によって変わる。授業期間中には国慶節と労働節の大型連休そして、正月三が日を除けば三連休以上の休みはない。





小学校の日課について、交流を行っている現地校の例をあげると日課は以下のようである。

【冬の日程】

【夏の日程】



午 前		午 前	
時間	内容	時間	内容
7:50	登校	7:50	登校
7:50~ 8:00	朝読み	7:50~ 8:00	朝読み
8:00~ 8:40	1時間目	8:00~ 8:20	体操
8:50~ 9:30	2時間目	8:20~ 9:00	1時間目
9:30~ 9:35	目の体操	9:10~ 9:50	2時間目
9:35~10:10	休みと運動	9:50~10:10	目の体操
10:10~10:50	3時間目	10:10~10:50	3時間目
11:00~11:40	4時間目	11:00~11:40	4時間目
11:40	放学	11:40	放学
午 後		午 後	
1:05	登校	1:05	登校
1:05~ 1:15	放送	1:05~ 1:15	放送
1:15~ 1:55	5時間目	1:15~ 1:55	5時間目
2:05~ 2:45	6時間目	2:05~ 2:45	6時間目
2:45~ 2:50	目の体操	2:45~ 2:50	目の体操
2:50~ 3:20	休みと運動	2:50~ 3:20	休みと運動
3:20~ 4:40	活動	3:20~ 4:40	活動
4:40	放学	4:40	放学



- ・食堂では、朝食、昼食を10元程度でとることができる。昼食は、学年毎に時間差でとっている。日本のように教室で食事をする学校はないように思われる。(小・中・高・大学も食堂)
- ・「朝読み」の時間は、前日に学習した内容の復習や当日の予習を行い、本を読む時間である。
- ・「目の体操」の時間は、目の疲れを取るために5分程度「目の体操」を行う。教室のスピーカーで音楽を流し自分の席で目の操をする。目の周辺のツボを、時計回りに2回8拍子で行い、また反対に2回8拍子でさえる。最後に手の合谷ツボを押さえながら、遠いところを眺める。
- ・「休みと遊び」は、体力アップのため全校児童がグラウンドで走ったり、体操などをする時間である。日本のようにそれぞれが自由に遊ぶ時間とは全く異なる。

## 5 考察

ここ天津市の現地校は、1時間単位間は40分と短い。授業では書く時間が少なく、書くこと・調べすることは宿題として課している、授業時間はその発表の時間が多い。

天津日本人学校の運動会を見学した現地校の校長は、日本の教育は素晴らしく参考にして取り入れたいと語った。しかし、国の方針などがあり自由にできないという言も聞く。

現地校の小1～小6までの児童を天津日本人学校に招いての交流会においても同様の感想を語ってくれた。日本の教育は、学習だけでなく特別活動などバランスのとれた良いシステムだと語った。

本校の国語教師、英語教師、体育教師が中国の小学校で授業を行った。初めて受けた日本式の授業を楽しみ感じ、もっと受けてみたいとの感想を口々に言っていた。

天津日本人学校に派遣され、3年間を中国天津に住んで感じたとは、中国の人口13億人と言われているが、日本の約10倍の人口の中で競争は私たちの想像以上であり、教育も同様である。現在置かれている貧しい生活環境を改善するためには子どもに夢を託し、優秀な小中学校、優秀な大学で学ばせたいという家族の強い願いがあり、子どもたちも期待を背負って全力で努力をしている姿がある。